「主の御言葉を聞け」

ルカによる福音書２４章２８－３５節

森島　牧人　牧師

先回学んだ聖書に、二人の弟子と共にエマオへの道を行かれる主イエスが、二人が神のことも主イエスの御業や御言葉のことも理解していないことを知って、「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」と言われたとあります（ルカ２４：２５）。主イエスと共に生きた二人が信仰をもって聖書（旧約）を読み、祈りをもって主の御言葉を聞き受け止めていたら、十字架の出来事が復活の前提であり、苦難の十字架が栄光への道筋の中にあることを理解したはずだったからです。

主イエスが旧約聖書の中の御自身への預言について語り聞かせながら、エマオへ近づいてもなお先へ行こうとされるのに対し二人は、「一緒にお泊りください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と強いて引き止めたと聖書は続きます。宿に入られ食卓につかれた主イエスがパンを裂き二人に渡されたその瞬間、二人の目は開き、見知らぬ旅人が復活された主であることが分かります。それと同時に主の姿は見えなくなったというのが「エマオ途上の顕現」の物語です。（同２４：２７－３１）

この物語の中心は、見知らぬ旅人と食事を共にする中で二人が復活の主イエスと出会うというところです。私たちも一人一人主イエスと出会い、今また主イエスと会うためにこの場所に集まって来ているという状況、ここに、主の復活の物語が一体何であるのかの手がかりがあります。

今日の聖書箇所の前後にある＜十字架・復活・ペンテコステ＞を通して分かることの第一は、復活の主イエスが、かつて主と共に生きて来た＜弟子たち＞の前に、姿を現わされたということ。第二は、それは必ず弟子たちが＜複数＞でいるところであったということです。ここで私たちは主イエスの生前の有名な御言葉「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中に（その間にという意味）いるのである。」（マタイ１８：２０）を思い出すのですが、キリスト者が信仰的集団として集まる場所とは、それは教会に他ならないことにも気づかされます。教会の信仰的な交わりの只中におられる復活の主イエス。教会の第一主日に行われる聖餐式で、私たちはイエスを中心とした食卓に集まり、主の裂かれたパンをいただいて喜びと力を与えられているのです。そして、聖書には、主イエスの生前の御言葉「二人または三人・・・」だけでなく、昇天に際しての「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（同２８：２０）と記されています。生前だけではなく世の終わりまでとのこの御言葉の中に、主の十字架の死と復活を解く一つの鍵があります。それは主イエスの生前、主との人格的な交わりの中で弟子たちが主と共に生き、主の宣教の言葉を耳にし、主の力ある業を見、主と共に食事をしていたその時、来るべき「神の国」は＜既に＞そこに来ていた、彼らはその中にいたということです。つまり神の支配である神の国は、遠くにあって私たちがこれから行くところではなく、共に集まって食事をしている聖餐式の中に、主の名によって集っている私たちの間に、＜既に＞存在しているということです。

エマオへ急いだ二人のように、これらの忘れ得ない体験を重ねた主との交わりの日々を突然断たれてしまった弟子たちの悲しみや失望は、私たちの想像を遥かに超えるものであったに違いありませんが、十字架の死から三日目に主イエスは復活されてマグダラのマリアたちに現れ、エマオ途上など弟子たちが複数人で交わるところに姿をお見せになり、弟子たちは主イエスが生きておられることを実感することになりました。この喜ばしい復活の主の顕現は四十日の間繰り返し起こされ、昇天の時には二百人の人々が主を見送ったと聖書記者は記しています。そしてこの昇天の日から十日目の＜五旬節＞に、神の御霊が弟子たち一人一人の上に降ります。これがペンテコステです。

この出来事によって原始教会と呼ばれる最初の教会が生まれ、それは今日まで継続し発展しています。つまり二千年前、教会が誕生することとなった出発点は＜復活＞にあったということです。そしてそれは、単なる歴史的出来事ではなく、今もなお主の名によって集まり、祈る教会の、複数人の上に、主イエスは臨まれているのです。

エマオ途上の弟子たちに現れて御自分の言葉を示された主イエスは、今も私たちの交わりの中におられ、悲しみ苦しみの中にいる私たちを慰め、新しい希望と力を与えてくださっています。キリスト者として、今も生きて働いておられる主と共に、神の御業のために生きて行きたいと願うものです。

（説教要約　羽入田悦子）